AGU 青山学院大学 NEWS No.39

AGUニューズ第39号
[2007年11月～12月号]
青山学院大学・広報入試センター広報課
〒150-8366　東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-8111（代表）
URL. http://www.aoyama.ac.jp/agunews/

相模原キャンパス

特集 AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY

世界初！偏光発光デバイスのメカニズムを発見！
――理工学部・長谷川美貴専任講師らの研究グループ――

AGU TOPIC
「ICT活用教育のFD/SDプログラム」が現代GPに採択！
日米大学野球で日本代表が“敵地”で初優勝の快挙
経済学研究科に「公共・地域マネジメント専攻」2008年4月開設

TOPICS
eLPCO国際シンポジウム2007開催報告
第5回青山学院会計サミット
ペンシルバニア州立大学IME学科訪問

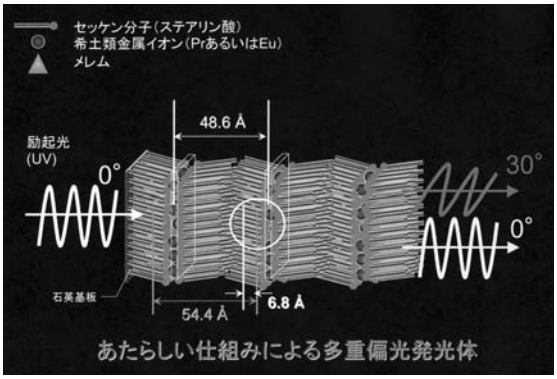
報告・お知らせ
2007年度青山祭・実行委員長メッセージ
2007年度給付奨学金・学業奨励賞
青山学院大学後援会報告

誌上公開講座
教養コア科目　科学・技術の視点（個別科目）
「地球と人間」

INFORMATION
オープンキャンパス開催報告

特集

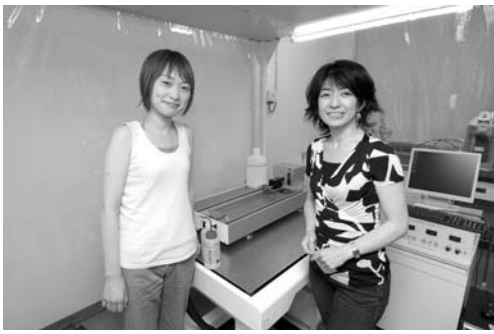
世界初！
次世代ディスプレイの夢をひらく偏光発光デバイスのメカニズムを長谷川美貴専任講師らの研究グループが発見！



あたらしい仕組みによる多重偏光発光体

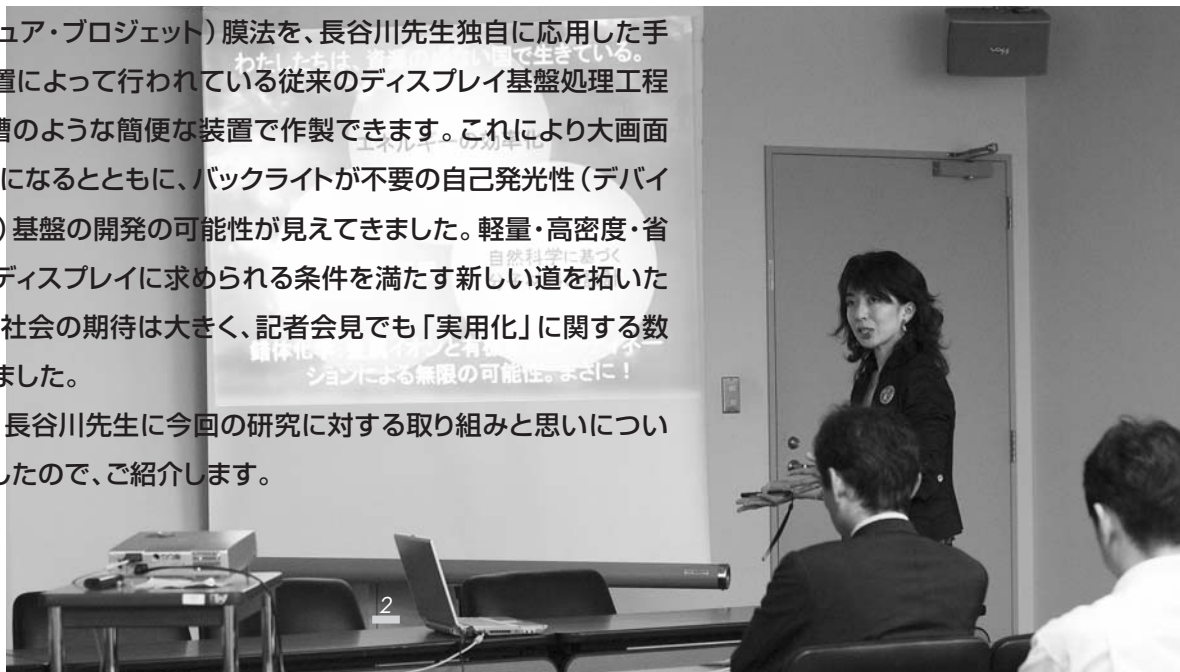
理工学部　化学･生命科学科
長谷川 美貴 専任講師

本学理工学部化学・生命科学科の長谷川美貴専任講師らの研究グループが、次世代のディスプレイ開発の可能性を拓く、まったく新しい偏光発光デバイスのメカニズムを解明しました。この研究は、長谷川研究室を中心に、「SPring-8」という大型実験装置を持つ財団法人高輝度光科学研究センター、独立行政法人理化学研究所、および旭化成（株）研究開発センターの協力を得て進められていたもので、セッケンのもとになる分子と希土類金属プラセオジム（Pr）を含ませた錯体に、メレムという三角形型の有機分子を加えると、0°と30°という特定の偏光角を持つ光を発する性質が現れることを発見。この発見は、英国王立化学会でも高く評価され、EUの光化学連合の公式ジャーナル「フォトケミカル・アンド・フォトバイオロジカル・サイエンス」誌（2007年7月4日発行）に研究成果が掲載されています。また、それに先立つ6月29日（金）、東京・丸の内にある文部科学省において、「セッケン分子と希土類金属から新しいディスプレイ材料開発の可能性」と題した記者発表が行われました。



長谷川先生の研究グループが開発したこの新しい偏光発光膜は、1930年代に開発されたLB（ラングミュア・ブロジェット）膜法を、長谷川先生独自に応用した手法で作製。大がかりな装置によって行われている従来のディスプレイ基盤処理工程と異なり、水を溜めた水槽のような簡便な装置で作製できます。これにより大画面発光性基盤の開発が容易になるとともに、バックライトが不要の自己発光性（デバイス自体が偏光を発光する）基盤の開発の可能性が見えてきました。軽量・高密度・省エネルギーなど、次世代ディスプレイに求められる条件を満たす新しい道を拓いた今回の研究成果に対する社会の期待は大きく、記者会見でも「実用化」に関する数多くの質問が出されていました。

7月4日の記者会見後、長谷川先生に今回の研究に対する取り組みと思いについてのお話ををうかがいましたので、ご紹介します。



――新しい偏光発光デバイスのメカニズムを解明した今回の研究への取り組みについて教えてください。

長谷川　今回の研究は、私が青山学院大学大学院生から取り組んできたいくつかの研究テーマを融合させたものです。まず、この研究のポイントの一つが私が修士課程で取り組んだLB膜法を使っているということです。LB膜というのは水面上に形成した単分子膜をガラスなど固体の基板に移しとったものです。かつては人工皮膚などへの応用が期待されていましたが、近年は「実用化に関しては」あまり話題になることがありませんでした。それでも私は、分子を人工的に無理なく集合化させるLB膜には、溶液や結晶とは異なる可能性があるにちがいないという、夢のような期待のような信念を持ちつづけていました。約10年間LB膜から離れていましたが、その間に取り組んでいた分子分光学や錯体化学の研究になんとか活かしたいという思いが、今回の研究成果を生んだのです。また、「SPring-8」という最先端の実験設備を使うことができたことも大きかったですね。この装置でないと今回のような薄膜の構造解析は難しかったでしょう。そして物理学や企業の先生方とのコラボレーションを図れたことも収穫でした。

――今回の研究成果によって可能性が見えてきた新しいディスプレイとはどのような利点と特色を持つものなのでしょうか？

長谷川　これまでの液晶ディスプレイなどの基盤は、リスクも、コストも大きい真空環境での作製過程で大きなエネルギーを消費してしまうのですが、私たちの方法は、極端に言うと水槽にジャブッとつけて、ゴソッと持ち上げるだけ。水と大気の界面を利用した環境にもやさしいフィルターなのです。実用化に向けてはまだクリアすべき課題がありますが、先駆けとなる研究成果については3月に特許申請を終えています。特定の角度を持つ偏光特性を利用して、たとえば、覗き見防止機能を持つ携帯電話や銀行ATMのディスプレイを、これまでよりコストが安く簡単に作ることができるようになるかもしれません。

――マスコミ発表後の社会からの反響はいかがでしたか？

長谷川　研究のことが新聞7紙に掲載されたその日に、メールや電話などで多くの反響が寄せられて驚きました。その多くは民間企業の研究者の方々で、実用化に向けたさまざまなアドバイスと励ましの言葉をいただき、たいへんありがたかったです。社会の関心の高さに身の引き締まる思いです。私は長らく純粋な基盤研究を中心とした研究生活を送ってきましたが、特許申請や今回のような社会への直接的なプレゼンテーションを通して、次第に「自分の研究を社会にどう位置付けるか」というテーマがはっきりと見えてきたような気がしています。今回の研究は、学生と一緒に試行錯誤しながら外部の研究機関や企業の方々のご協力を得ながら、取り組んできました。世界に先駆けた最先端の研究で、素晴らしい結果を出せたことは、今後の研究へのモチベーションにつながりますし、特に一緒に試行錯誤してくれた、研究室の1期生であり博士後期課程で学ぶ石井あゆみさんはこの課題で大きく成長したと嬉しく思っています。学生にも大きな刺激になっていると思います。

――ところで長谷川先生のご専門である錯体化学とは、どのようなものなのですか？

長谷川　錯体とは、金属イオンと有機分子からなっていて、その魅力は金属と有機物それぞれの物性とは異なる新しい性質が引き出されることにあり、研究対象として興味がつきません。私はその中で主に錯体分子の色、および光に着目した研究を行ってきました。錯体が放つ光は、自然にやさしいエネルギーです。今後、研究を通して、化学者の立場からエネルギー問題の解決に貢献していきたいですね……そういえば、現在、来春予定しているチャリティコンサートで、錯体の光を活かした照明に材料の立場から協力できないかというオファーがきています。化学者として現在とりくんでいるこの研究テーマにめぐり会えたことは私にとってとてもハッピーなことだと思っています。

――長谷川先生がこの分野に進まれた動機と今後の研究活動へのモチベーションについてお聞かせください。

長谷川　私は、もともと古典文学が好きな文学部志望の高校生でしたが、小学生の頃から毎年続けていた夏休みの自由研究を通して知った理科の面白さが忘れられず、結局、本学の理工学部に入学し、化学者としての道を歩むことになりました。もちろん、家族や恩師や多くの方々の支えや理解に恵まれていたこともラッキーでした。錯体化学は、まだまだこれからの研究領域で、自由な発想で新しいことを発見するサイエンスの面白さを存分に味わえる研究分野だと思います。私自身、これまで世界に向けていくつもの研究成果を発表してきましたが、今回は錯体化学、分子分光学、分子間相互作用などにわたる、思い入れの深い研究テーマが融合した成果なので、新しいスタートラインに立ったようなワクワクした気分です。

祝：長谷川先生、そして青山スピリッツ

去る6月29日（金）、私は丸の内の文部科学省（仮庁舎）で行われた「セッケン分子と希土類金属から新しいディスプレイ材料開発の可能性」と題した長谷川美貴先生の記者会見に同席しました。当日の長谷川先生は、ふだんの白衣あらためスーツ姿、科学担当記者の厳しい質問にも適確に対応、とても凛々しいものでした。話は疎水性と親水性のコントラストの妙味に始まり、石鹸分子の話題から希土類の面白さ、そして偏光性へと続き、何といっても、その製法の素朴さに工学的な応用の可能性の広がりを感じさせるものでした。学部長という立場上、私は彼女が外部資金獲得を積極的に行っていること、また彼女のグループが足繁く「SPring-8」（兵庫県にある財団法人高輝度光科学研究センターの大型実験施設）に通っていることを知っていました。超伝導の秋光先生のグループに匹敵するヘビーユーザです。「だいじょうぶか？頑張り過ぎるなよ。」と心配になるほどで、かなりのハードワークだったに違いありません。

理工学部は、どの組織にもあるようにいくつかの問題点を抱えていることは事実ですが、恵まれた研究環境と素直な学生に支えられ、他大学にけっして引けを取らない成果を上げ続けています。たとえば、電波・電磁波を対象に、家電製品から高速道路料金所まで幅広い応用研究を行っている電気電子工学科の橋本先生や、太陽電池のオーソリティとして各方面で活躍されている同学科の中田先生など、産業界と深い関わりをもった研究も高く評価されています。

金属の腐食という観点からユニークな研究を展開し退職された機械創造工学科の竹本先生も、最終講義で「多くの優秀な学生によって研究を進めることができた」と締めくくられていました。竹本先生に限らず、理工学部は社会的に高い評価を受けている研究グループを多く抱えています。そのなかでも、今回注目された研究成果が「若手」「女性」「本学出身者」である長谷川先生によるものであることは、本当に喜ばしいことです。いつもの元気印はまだまだ続き、本学の学生、とりわけ優秀な女子学生をエンカレッジしていくことでしょう。

理工学部長　稲積 宏誠

特集

「極めて短いストーリー」の英作文コンテスト 第1回ESSC（Extremely Short Story Competition）で 本学学生10名が受賞しました。

本学国際政治経済学部の本名信行教授が会長を務める日本「アジア英語」学会の主催で行われた「第1回ESSC（Extremely Short Story Competition）」（後援:日本英語検定協会、（株）ベネッセコーポレーション他）の〈大学生・一般の部〉において、本学学生10名が入賞しました。
ESSC（Extremely Short Story Competition）は、その名の通り「極めて短いストーリー」の作文コンテストで、フィクション、エッセイ、感想、思い出など、内容・テーマはまったく自由ですが、ちょうど50語で書くというルールがあります。また、作品はプレゼンテーションソフトのマイクロソフト・パワーポイントのファイルで応募します。
第1回は、2006年10月1日～12月31日まで作品募集が行われ、中高生、大学生、一般社会人あわせて751点の応募があり、最終審査には開発者のハッソール教授のほか、アメリカやカナダの英作文の専門家も参加しました。

本名教授にESSCのコンセプトについてうかがうと共に、第1回受賞者のうち3名の本学学生に、それぞれがESSCにチャレンジした動機、受賞の感想についてうかがいました。

ESSCは、もともとアラブ首長国連邦（UAE）ザイード大学のピーター・ハッソール（Peter Hassall）教授が開発したプログラムで、私は日本の英語学習者向け教育プログラムとしてたいへん有効な方法だと思い、会長を務める日本「アジア英語」学会のコンテストとして導入しました。

多くの学生は、英語で長い文章を書くことが苦手です。しかし50語程度の短文ならそれほど苦労せずに書くことができるでしょう。特に私たち日本人は俳句という究極の短文芸術と親しんできましたから、ごく短い文章の中に自分の感性と論理を盛り込む作業にそれほど抵抗感はないはずです。短文といえども、「トピック→展開→結語」という文章構成の基本要素は長文と変わりません。すなわち短文を書くトレーニングを積むことで、長文を書くために必要な基礎を効果的に身につけることができます。

国際政治経済学部
国際コミュニケーション学科
本名 信行 教授

ESSCの特色のひとつは50語という制約です。49語でも51語でも失格なので、単語選びなどの面でかなり悩むことになりますが、実はその試行錯誤こそが英語の表現力を磨くとても良い勉強になるのです。単語や表現を練りながら、自分の伝えたいことやイメージをわかりやすい文章にする……こうしたプロセスを通して単に英作文の勉強を超えたコミュニケーションの根本を考える機会ともなることでしょう。

もうひとつの特色は、応募作品に「アメリカ英語」や「イギリス英語」としての正しさを求めていないことにあります。アジアには日本人としての英語でOKなのです。むしろネイティブスピーカーを唸らせるような、日本人独自の英語表現が出てくると面白いと思います。

こうした特色を持つESSCは、英語の初級者から上級者まで、そしてノン・ネイティブとネイティブが互角に競うことができる多くの人に開かれたコンテストでもあります。

第1回の応募作品は、私たちの期待を超えるレベルの高い作品が集まり、大きな手応えを感じています。

左から水野愛美さん、鹿目はるかさん、田中まり子さん、本名信行教授

「Tears」 日本「アジア英語」学会会長賞

水野 愛美さん（国際政治経済学部4年）

自分の英語力を向上させるための良いチャンスと思って挑戦したESSC。50語という制約の中で、いかにドラマを作り、なおかつわかりやすく、誰もがイメージを浮かべることができる文章に仕上げることができるか……さまざまな英語の言い回しを探していく過程でかなり悪戦苦闘させられましたが、同時に英語でのコミュニケーションの面白さや深さを知る貴重な体験となりました。海外で生活した経験もなく、飛び抜けて英語ができるわけでもない私が会長賞をいただくことができ、驚きながらも感激しています。今後、英語を学んでいく上での大きな自信にもなりました。第2回もぜひ挑戦したいと思っています。

「My Family」 優秀賞

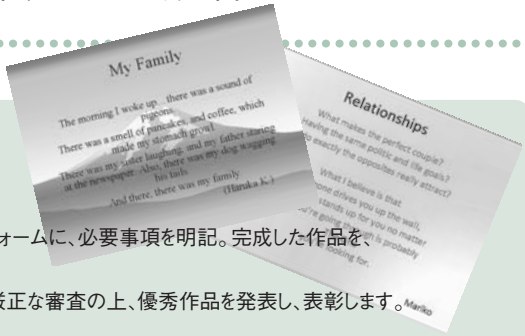
鹿目 はるかさん（国際政治経済学部4年）

私は帰国学生です。子どもの頃から英語で詩を書くのが好きで、小学校の「HAIKU（俳句）」作りの授業が大のお気に入りでした。ESSCは、私にとってそんな思い出の延長線上にあり、心から楽しんで取り組むことができました。私が重視したのは読み手のことを考えたわかりやすさです。テーマも誰にとっても身近な“家族”を選びました。これは海外生活を通して家族の大切さを実感した私自身が書きたかったテーマでもあります。ちょうど50語で書き上げた時は大きな達成感がありました。でもまさか自分が入賞するとは！　このうれしさは、第2回の応募作品を書くエネルギーになりそうです。

「Relationships」 佳作

田中 まり子さん（国際政治経済学部4年）

小学校5年から2年弱の期間の海外生活以来、私は英語への関心を育み続け、大学受験では政治・経済と英語のどちらもしっかり学べる青学の国際政治経済学部を選びました。そして3年生だった昨年、本名先生の授業でESSCのことをうかがい、つねづね考えていた人と人とのコミュニケーションのあり方について書いてみようと決心。テーマはすぐに決まったのですが、自分の考えていることを、独りよがりではなく、誰にも理解できる50語ぴったりの文章にすることは予想以上に大変でした。頭の中で考えを整理し、すっきりした文章の流れを作り、辞書と首っ引きで最適な単語や熟語を探す……まだ書きたいテーマがあるので、第2回目でも同じ苦労を味わってみるつもりです。



第2回ESSC　応募要項

●募集期間／2007年5月15日（火）～11月15日（木）
●応募資格／中学生、高校生、大学生、一般社会人どなたでも可
●応募方法／第2回ESSCのウェブサイト（http://essc.fit.ac.jp/apli_outline.html）にある応募フォームに、必要事項を明記。完成した作品を、パワーポイントのファイルとして添付して送信してください。
●作品発表／投稿作品を当サイトの「応募作品」ページにてご紹介します 。応募受付終了後、厳正な審査の上、優秀作品を発表し、表彰します。
※郵送による受付けは、中学校と高等学校の先生方を通じた、団体投稿のみお受けしております。

ヒューマン・イノベーション研究センターの「ICT活用教育のFD/SDプログラム」が平成19年度「現代GP」に採択!

青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センターの「ICT（注1）活用教育のFD（注2）／SD（注3）プログラム――人材育成の一翼を担うICT活用教育の質向上を実現する研修プログラムの開発と普及――」が、平成19年度の文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（テーマ:教育効果向上のためのICT活用教育の推進）」に選定されました。

このプログラムについて、研究推進者であるヒューマン・イノベーション研究センター所長の佐伯 胖教授（文学部）と副所長の玉木 欽也教授（経営学部）、並びに同研究センターの松田 岳士先生と齋藤 裕先生からお話をうかがいました。

ヒューマン・イノベーション研究センター 所長
文学部 教授
佐伯 胖

ヒューマン・イノベーション研究センター（HiRC）は、「学ぶ意欲を持ち、主体的に課題発見・解決に取り組める人材」すなわち「学びのプロ」を育成するために設置された機関です。現場の先生方と共に、学ぶ意欲を学生に喚起させる「良い教育」とは何かを考え、その実現のために必要なICTおよびシステムを開発していくことを目的としています。

本学では、既に10年ほど前からICT活用教育を積極的に推進しており、2005年にはeラーニング人材育成研究センター（eLPCO）を設置し、全学生を対象としてeラーニングの専門家を育成しています。今回現代GPに採択された取組は、eLPCOの活動を通して蓄積されたノウハウを活用して、ICT活用教育に取り組んでいる大学教員の教育力と大学職員の教育支援能力を向上させる研修プログラムを提供し、教育の質向上を図るというものです。本当に面白い授業・学習意欲を湧かせる環境作りをめざし、大学教職員およびICT活用教育を支援するTA（注4）に対して、ICT活用教育の質向上を目的とするFD、SDの機会を継続的に提供していきます。

ヒューマン・イノベーション研究センター 副所長
総合研究所eラーニング人材育成研究センター センター長
経営学部 教授
玉木 欽也

従来のFD/SDプログラムは、集合研修型がほとんどでした。本取組では、受講者の多様なニーズに応え、ICTを活用したコースのほか、集合研修、ワークショップなどを組み合わせたブレンディッド・ラーニング形式で実施します。共通プログラム、専門プログラム、実践プログラムを用意し、個々のニーズに合わせて自由に受講できるようにしました。内容については以下の通りです。

●共通プログラム

ICTを活用した教育について、教職員が知っておくべき基本知識、スキル、教育の質保証についての認識に関する研修を行う。一部コースについては私立大学情報教育協会との連携のもとに実施する。

●専門プログラム

「ICTを活用した授業の設計・評価・改善の実践」「ICT教育のための学習支援方法」「学習効果を高めるコンテンツの開発」の3分野に分けて実施。教職員自らが直面している課題に応じた個別履修計画により受講する。

●実践プログラム

ICT活用のノウハウを自らの授業に応用できるよう、フィールドワークやワークショップ形式の研修を行う。

日本のFDについては、アジア諸国の中でも大きく遅れをとっていますが、このプログラムはFDだけでなくSDの機会を提供しているところに特長があります。ICT活用教育を中心にすえた教職員の意識変革を促進し、現状では「学ばせられている」学生の意識を主体的に「学ぶ」へと変革させることのできる“学びのプロ”を育てます。

ゆくゆくは本取組を社会人の方々に向けて、企業の事業イノベーションを推進する「組織変革のプロ」育成プログラムとしても広げていきたいと考えています。

ヒューマン・イノベーション研究センター 助手
松田 岳士

大学院時代はコミュニケーションと教育工学を学び、現在は現場の先生方とのパイプ役であるコミュニケーションマネージャーとしての役割を担っています。

eLPCOでは公開講座を今までに2回行い、学内外から計140名もの教職員の方々にご参加いただきました。そのときの参加者アンケートを見るとFD/SDに対するニーズがとても多く、本取組がいかに現場の先生方に必要とされているかがわかります。今後は学習の仕組みや環境作り、シナリオ作りに必要不可欠なICTを活用し、教職員、TA、本センターが一体となって教育的課題を解決していける体制構築をめざします。

ヒューマン・イノベーション研究センター 客員研究員
齋藤 裕

予算や人事なども含めた全体の流れの構築にも関わり、プロジェクトマネージャー的な役割を担っています。また、インフラ関係も担当しています。ICT活用教育の分野では、既にパソコンやネットワークなどのインフラ部分、およびコンテンツの部分に関しては、ある程度システムが揃いつつある状況です。後はやはり、そのシステムを活用する“人”の意識の問題。ヒューマン・イノベーション研究センターとして、文字通り“人の革新”のための活動を展開していきたいと思います。

●11月26日（月）に、イベントを行います。
詳細については後日ホームページにてお知らせします。

（注1）ICT（Information and Communications Technology）
情報コミュニケーション技術。

（注2）FD（Faculty Development）
教員が授業内容・方法を改善・向上させるための組織的取り組みのこと。

（注3）SD（Staff Development）
教職員などスタッフの能力開発のこと。

（注4）TA（Teaching Assistant）
学習支援者。

経済学研究科に新専攻
2008年4月「公共・地域マネジメント専攻」開設

経済学部長
平澤 典男 教授

2008年4月に誕生する経済学部「現代経済デザイン学科」のコンセプトは、「公共・地域の視点から社会経済を設計（デザイン）する力を養う」ことです。この学科での学びをさらに深め、より高度な知識・技術を身につけることを目的に、同じく2008年4月、経済学研究科に「公共・地域マネジメント専攻」博士前期課程を開設します。入学定員は5名で、公共部門や国際・地域社会を取り巻く諸問題に対応する新たな制度を設計するとともに、それを運用・管理・評価できる「政策立案エキスパート」「地域開発エキスパート」「非営利組織マネジメント」などの専門職業人、研究者を育成します。

独自のカリキュラムと「チームプログラム」

カリキュラムはセメスター制（半期科目）を導入し、1年次前期にコースワークを設置。マクロ経済学・ミクロ経済学・計量経済学・GIS（地理情報システム）の基礎科目を集中的に学び、専門科目を履修する前に大学院レベルの基礎的な経済理論と統計分析手法を習得します。また、特定の指導教員の元に研究を進めていく従来のスタイルではなく、現代経済デザイン学科所属の教員10名がチームとなって院生全員を教える「チームプログラム」を取り入れているのも大きな特長です。演習科目も充実しており、専門演習のほかにプロジェクト演習、ワークショップを導入。プロジェクト演習は、公共・地域・GISの3分野の教員が複数で担当し、分野横断的な研究テーマに対して、問題設定の新たな枠組みや解決策の提案、独創的な制度設計の可能性を探究します。ワークショップは、外部から研究者や実務家の講師を招いて研究報告と討議を行います。

GISを極める

GIS（地理情報システム）とは、地理（G）と情報（I）を融合させることで、さまざまな経済分析が可能となるシステム（S）のことです。教育・研究における空間分析のツールとして、本学経済学部が社会科学系学部としてわが国で初めて本格的に導入。今回現代経済デザイン学科を開設するにあたり、地域・地理を専門とし、GISの分析手法を熟知する教員を同学科所属にしました。GISは公共・地域分野を実践的に研究する上でとても重要なツールであり、本専攻で学科以上にGISによる分析手法を身につけることができるでしょう。

広がる大学院の可能性

本専攻では、従来の経済学専攻と同様「大学院科目特別履修制度」を導入しているので、学部4年生は大学院開講科目の一部を履修でき、博士前期課程1年間で修士号を取得することも可能です。一度就職した学生が大学院に戻って学ぶ際に短期間で修了できるよう、取得単位を一定期間保持できる制度の採用も検討しています。

「公共・地域マネジメント専攻」は、博士前期課程の定員増員、博士後期課程開設、地域・社会と連携して研究を進める「地域経済研究センター」設立など、将来実現させたい構想をたくさん持っています。現在の社会経済システムに疑問を持ち、新たな社会制度を創り上げていきたいと考える方々の挑戦をお待ちしています。

日米大学野球で日本代表が“敵地”で初優勝の快挙!
本学の小窪君が主将として代表チームをまとめました。

第36回日米大学野球選手権大会が、7月4日（水）～8日（日）の日程で米国において開催され、日本は3勝2敗の成績で優勝を飾りました。米国を会場とした大会は今回で19回目を数えますが、“敵地”で日本が勝ち越したのは今年が初めてのこと。この快挙を果たしたチームを主将としてまとめたのが、本学野球部でも主将を務める小窪哲也君（経済学部4年）です。代表チームの主将という重責を担うことで感じた、現地での喜びや苦労について、お話をお聞きしました。

●

日本代表ともなると、それなりに自信やプライドを持った選手たちが集まります。お互いに意識もしますし、僕自身もそうでしたが、「みんなにいいところを見せてやろう」と、どうしても力が入ってしまい、通常のプレーを忘れがちです。渡米してからも一人ひとりがバラバラで、“チームとしてまとまっていない”と感じていました。そして、そんな不安な状態のままで大会初日を迎えたんです。

第1戦では、春のリーグ戦で大活躍だった東洋大の大場投手が、いきなり序盤にノックアウトされ、「あの大場が打たれた…」とのショックがチーム内に走りました。ほとんどがメジャーリーグのドラフト候補という米国選手たち。「こんなやつらに勝てるのか?」と、正直弱気にもなりました。

そんなチームの流れを変えてくれたのは、第2戦で先発した慶應大の加藤投手でした。前日7点取られた米国打線を7回途中まで2失点に抑え、最後は3-2で勝利。この1勝によって、個人として「いいところを見せよう」ではなく、チームとして「とにかく勝ちたい」との思いが全選手に芽生え、ようやくチームがひとつになることができたのです。

第3戦、第4戦と個々のプレーから力みが消え、普段通りのプレーで日本代表は連勝。この「普段通りにできた」ことが勝因であり、また「普通にプレーすれば米国にも負けない」と、大きな自信にもなりました。

本学の河原井監督が代表チームの監督だったこともあり、僕自身も主将という大役ですが、特に気負うこともなく、青学でいつもやっているのと同じ気持ちでチームと接していました。そして何より、各大学の主力選手との交流は大いに刺激になり、得ることが多くありました。自分が得た貴重な経験を青学のチームメイトたちにも伝え、秋のリーグ戦での躍進につなげたいと思います。

野球部主将
（経済学科4年）
小窪 哲也 君

「各国大使講演シリーズ」第7回 王 毅駐日中華人民共和国特命全権大使「21世紀の中国と日中関係」

今回で7回目となった各国大使講演には、6ヵ国協議の議長を務めた中国を代表する外交官として評価の高い王毅駐日中国大使をお招きした。会場は、学外の方を含めて300人を越える参加者があり満席の盛況でした。

改めていうまでもなく中国経済はこの20年ほど二桁の急成長をとげており国際政治においても発言力をもってきています。昨年10月、安倍首相が首相就任早々に中国を訪問して日中関係は新しい局面に入り、来年に北京オリンピックの開催をひかえて中国の政治・外交のゆくえに注目が集まっています。

武藤元昭学長の挨拶のあと、王大使は流暢な日本語で次のように話された。まず中国経済について、中国の大きな潜在的マーケットと豊かな人的資源などの理由からさらに成長は続くと予想。だが、同時に急成長に伴う問題として5つのアンバランス――沿岸地域と奥地、都市と農村、工業と農業、人間と自然、そして中国と世界のアンバランスがあると率直に指摘しました。政治についても、中国の社会主義体制の維持と社会改革との間のバランス――発展の目標、改革の推進、そして社会安定の保障の間のバランスをいかにはかるかが課題だといい、その中でとくに3つの課題について述べられた。第一が、政策決定過程における民主化、第二が法に従った行政――法治国家を作ること、そして第三に権力をチェックする体制を完備することです。

軍事・外交については、国防力の近代化を進めるとともに政策の透明度を高めることが重要だと述べ、対外的には、まだ一人当たりのGDPが2,000ドルの中国（日本は35,000ドル）はさらに成長を続ける必要がありますが、平和的発展に徹して、中国は覇権を唱えないと述べました。とくにアジア諸国と中国とは互いに補完し合う関係にあり、わけても日本とは「アジアの平和と発展のために汗を流す」ことが中国の政策であるといい「アジアのために日本と一緒にやりましょう」と述べられた。

王 毅駐日中国大使

最後に、これからの日中関係については「戦略的互恵関係」を実現することが日中のみならずアジア全体の利益になるとして、さらなる相互理解、相互交流を深めることが重要だと力説。温暖化防止も含めて、アジア全体が共通の利益を得るために、それぞれが透明性を高め、アメリカとも対話しながら、国際協調をとるのが中国の基本姿勢だと、王毅大使は講演を体系的にまとめられた。

質疑応答のなかで、中国の留学生からの「留学生はどういう役割を果たせばよいのか」という質問に対して「民間大使としてがんばりなさい」と大使が答えると、会場から拍手がおこりました。

共催者の「ジャパン・タイムズ」がこの講演を大きく報じましたが、変わろうとしている中国の姿が王毅大使を通して伝わってくる講演でした。

（司会　国際政治経済学部長　土山 實男　記）

eLPCO 国際シンポジウム2007開催報告 International Cyber Community: Beyond e-Learning

2007年7月18日（水）、本学総合研究所eラーニング人材育成研究センター（eLPCO）は、国際シンポジウム2007「国際サイバーコミュニティ:eラーニングを超えて（International Cyber Community: Beyond e-Learning）」を開催しました。

eLPCOは、平成17年度文部科学省サイバーキャンパス整備事業に採択されたほか、「e-Learning専門家の人材育成―世界に通用する専門家育成プログラムの開発と普及―」が同省平成17年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択され、国内外の連携を通じてサイバーキャンパスの普及と、5種類のeラーニング専門家の人材育成および各専門家の資格などに取り組んできました。

今回開催された国際シンポジウムは、サイバーキャンパス整備事業の中間報告として行われたもので、国内外で活躍する専門家が多数講演者として登場しました。

まず第1部「サイバーキャンパス（Cyber Campus System）」では、玉木欽也eLPCOセンター長からの報告と、タイ・サイバー大学プロジェクトのDirectorであるSupannee Sombuntham教授から、タイでの取り組みが紹介されました。

第2部「教職員開発（Faculty and Staff Development & Pre-and In-Service Teacher Education）」では、タイ・サイバー大学のAnuchai Theeraroungchaisri博士が教職員開発の一環として行っているeラーニング専門家教育プログラムの開発方法、普及、運用についての講演。続いて米国・NASAで教師教育を経験されたLesley Garner博士による科学教育におけるIT活用が、ユニークな教材の実例をあげて紹介されました。

第3部「サイバーコミュニティ形成のための英語教育」では、中国の深圳大学の斉牧博士による「中国における国際協働語としての英語」と題して講演を行った後、本名信行本学国際政治経済学部教授ら、国内の研究者による研究の取り組みが発表されました。本名教授の発表にはゼミの学生たちもプレゼンテーションを行い、会場から温かい拍手を受けていました。

最後には、シンポジウムにご来場いただいたEstifanos Afeworki駐日エリトリア大使からの心のこもったメッセージをいただき、世界各国の代表者と共に、国際的共同研究を推進し、グローバルなサイバーコミュニティの形成の実現を目指す本シンポジウムに大きな花を添えていただきました。

Estifanos Afeworki駐日エリトリア大使

第5回青山学院会計サミット

2007年7月25日(水)、青山キャンパスのガウチャー・メモリアル・ホールにて「第5回青山学院会計サミット」が開催されました。過去の「会計サミット」に対する評価やテーマがタイムリーだっただけに、今回は事前の参加申込者が予定会場の収容人数を超過することとなり、主催者としてはうれしい悲鳴が出るほどでした。今回は、「市場の役割と会計・監査への期待」のテーマの下に、第一部の特別講演「今、会計がこんなに面白い―ベストセラー会計士作家が語る会計の裏表―」に続いて、第二部では、「市場が期待する会計・監査、そして、会計・監査が求める市場の役割」と題してのパネル討論会が行われました。第一部の講師である山田真哉氏は『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』(光文社)などの著書で有名な若手会計士であり、会計との感動的な出会いから始まり、会計を学ぶことの喜びを易しく話されました。続いての第二部では、まさに、現在、わが国の証券市場及び監査業界を代表する5名の登壇者を迎えての、国際的視点に立っての最新かつ刺激的な討論が展開され、社会に対しての新たな情報発信がなされたことから、「会計サミット」の趣旨が大いに生かされたものと思っています。市場側からは、今後わが国が目指すべき世界をリードする市場の構築と監査の重要性が指摘され、監査人側からは、国際的に遜色のない会計及び監査制度の構築に向けた改革を踏まえて、会計士の活躍の場が非常に大きくなっているとの指摘がなされました。当日の参加者においても、会計プロフェッション研究科の学生、大学関係者、企業関係者だけでなく、各界の重鎮も多数参加されており、この「会計サミット」に対する期待の大きさを実感しました。こうした期待に応えるため、第6回以降も、斬新な企画をしたいと思っています。

第5回　青山学院会計サミット
「市場の役割と会計・監査への期待」(以下、敬称略)

第一部　特別講演
「今、会計がこんなに面白い―ベストセラー会計士作家が語る会計の裏表―」
山田 真哉(公認会計士)

第二部　パネル討論会
「市場が期待する会計・監査、そして、会計・監査が求める市場の役割」

●パネリスト(順不同)
斎藤 惇(東京証券取引所代表取締役社長)／筒井 高志(ジャスダック証券取引所代表執行役社長)／高松 明(名古屋証券取引所常務執行役員)／水嶋 利夫(新日本監査法人理事長)／佐藤 正典(あずさ監査法人理事長)

●コーディネーター
八田 進二(青山学院大学大学院会計プロフェッション研究科教授)

理工学部経営システム工学科が、理工系学科初の海外研修旅行を実施!
～米国・ペンシルバニア州立大学IME学科を訪問～

理工学部の経営システム工学科では、学習環境のさらなる充実を図るために、学科独自でのさまざまな施策を計画中です。その一環として、9月7日(金)～15日(土)の日程で、米国・ペンシルバニア州立大学への海外研修旅行を実施しました。海外研修といえば、まず文学系の“語学”研修が頭に浮かびますが、理工系学科が企画する海外研修は本学では初の試みでした。今回の海外研修旅行プロジェクトの中心メンバーである、経営システム工学科主任田部勉教授、および研修に参加した2名の学生にお話をお聞きしました。

経営システム工学科主任
田部 勉 教授

訪問先のペンシルバニア州立大学のIME(Industrial and Manufacturing Engineering)学科は、我々経営システム工学科と非常に近い研究を展開しています。本学の学生たちが、そのような学びの環境に足を踏み入れることで、米国における経営工学の動向について学ぶとともに、現地の学生たちとの交流も深めてもらおうというのが、海外研修の大きな目的です。第1回目となる今回は、宋少秋准教授の引率のもと、大学院生5名、学部生4名の計9名が参加しました。9日間という短い期間でしたが、そのなかから9名の学生たちが“何か”を感じ取ってきたはずです。まったく初めての試みで、まだまだ改善すべき点もあるかもしれませんが、この海外研修旅行が経営システム工学科の大きな特色となり、近い将来には、正式な形での協定校としての締結、さらには海外インターンシップの実施などにもつなげていきたいですね。

大学院　理工学研究科理工学専攻
マネジメントテクノロジーコース博士前期課程
稲垣 弘樹さん

実際に米国の大学の講義を見学し、「自分たちと同じ様な研究に取り組んでいるんだ」というのが第一印象。そのことによって、日本だけでなく、もっとグローバルな視点で考えることが必要との気持ちを抱きました。行程のなかには、歓迎会や食事会など、現地の学生たちとの交流を深める機会もあり、片言の英語でしたがコミュニケーションを取り、大いに刺激も受けました。来年4月には、逆に彼等が日本に来る計画があるとのことで、そのときは自分たちの研究内容を存分にアピールしたいと思います。今から楽しみですね。

経営システム工学科3年
矢野 洋平さん

実は、今回の研修旅行が自分にとって初めての海外だったんです。もう見るものすべてが新鮮で、感動の連続。自分自身の視野が広がった気がします。何より異国の大学を訪ねられた経験が貴重でした。通常の旅行では観光地巡りはできても、大学の授業を受けたりはできませんから。また、先方の学生たちを前に、英語によるプレゼンテーションも体験。青山学院大学の簡単なプロフィール紹介でしたが、多少は度胸もついたと思います。あっという間の9日間だったので、次回も機会があれば、ぜひ参加したいです。

2007年度青山祭、実行委員長からのメッセージ

毎年、前夜祭のコンサートでは超豪華アーティストが登場し、一般の方々も多数来場。マスメディアも注目する青山祭は、全国でも屈指のスケールと内容を誇る大学祭です。2007年度実行委員長から、学生のみなさんへのメッセージをお届けします。

2007年度「青山祭」は、11月2日（金）に前夜祭、11月3日（土・祝）～5日（月）の3日間に本祭が開催されます。

今年度のテーマは「It's AoyaMagic!」。青山祭開催期間中のキャンパスは、日常とはまったく異なる空間となることから、“キャンパスが魔法にかかっている状態”ととらえ、「青山（Aoyama）」と「魔法（Magic）」による造語を作りました。

現在、私たち実行委員は、毎年恒例の本部企画、著名人の講演会、そして青学生によるミュージックフェスティバルやダンスフェスティバルをはじめ、他の大学祭では味わうことができない青学による素敵な「Magic」を、より多くの方々に楽しんでいただけるよう日々努力しています。また、開催期間中のゴミ減量化やエコ容器の使用など、環境問題への積極的な取り組みにも、よりいっそう力を入れていきたいと思っていますので、参加する青学生の方々のご協力をお願いします。

なお、出演アーティストや講演会などの最新情報は、青山祭ホームページ（http://www.aoyamasai.com/）に順次アップします。在学生はもちろん、卒業生、ご父母の方々もぜひご来場ください。

2007年度青山祭実行委員長　**奥村 泰之**君（経済学部3年）

「クリスマス・ツリー点火祭」11月30日（金）に開催

聖歌隊の“天使の歌声”&ハンドベルの“奇跡の音色”

イエス・キリストの降誕を祝うクリスマスまでの4週間をアドヴェント（待降節）と呼びます。その喜びの時を心に刻むために、青山学院全体をあげての礼拝「クリスマス・ツリー点火祭」を2007年11月30日（金）の夕刻から青山・相模原両キャンパスで実施します。当日は、普段は別々で活動している「大学聖歌隊」と「ハンドベル・クワイア」が、1年に1度だけの素敵な“コラボレーション”を相模原キャンパスで聴かせてくれます。

大学聖歌隊　隊長
経営学部経営学科3年　**平良 綾乃**さん

点火祭での歌声に憧れて聖歌隊に入った人もいるくらい、クリスマス・ツリー点火祭は、大学聖歌隊にとっても特別な礼拝といえます。

初めて点火祭に参加した1年生のときは、とにかく無我夢中で歌いました。2年目の昨年は少しゆとりもでき、歌っている最中に、観客席で振られるペンライトを「きれいだな」と感じる余裕がありました。そして3年目となる今年は、これまでと違って隊長としての参加。自分だけでなく、隊員全員のこと、そして点火祭に集まっていただくすべての人のことを考えながら、心を込めて歌いたいと思います。

青山学院では、四季折々ごとのきれいなキャンパスを見ることができますが、そのなかでも点火祭は、特に印象に残る美しい表情を見せてくれます。まだ見たことがない人には、ぜひ“ツリー点火”の感動的瞬間を味わっていただきたいです。ハンドベル・クワイアとともに、私たち聖歌隊の歌声も厳かな礼拝を盛り上げるお手伝いをさせていただきます。当日は多くの方々と一緒に、素敵な時間と空間を楽しめるといいですね。

ハンドベル・クワイア　隊長
文学部フランス文学科3年　**髙木 裕美子**さん

ハンドベル・クワイアにとって、点火祭は1年間のなかでも最も印象に残る礼拝のひとつです。まず屋外で演奏する機会がほとんどないため、きれいなクリスマス・ツリーをバックにした屋外ステージが新鮮に映ります。さらに学生や教職員の方はもちろん、相模原キャンパス周辺のみなさんも多く集まっていただける地域にも開かれた礼拝なので、演奏する側の気合いの入り方も自然と違ってくるのです。

点火祭に集まった人たちのざわめきが、演奏の開始の合図とともに徐々に小さくなり、その場の空間が一瞬、静寂に包まれます。そしてハンドベルの音色が静寂の中に鳴り響き、演奏がスタート。実は昨年は私が、その演奏スタートの第一音目を担当しました。あの緊張感と感動は一生忘れないと思います。

聞いている方々に演奏の楽しさを伝えるには、私たち自身が楽しみながら演奏することが大切です。ハンドベルを持つ演奏者全員が心をひとつにして素敵な音色を奏でることで、その空間にいる人全員の心をひとつにつなぎたいと思います。ぜひ、相模原キャンパスのクリスマス・ツリー点火祭にお越しください。

青山キャンパス

相模原キャンパス

2007年度 給付奨学金・学業奨励賞

青山学院大学給付奨学金は、各学部に所属する2年生以上の学生で、前年度において卓越した学業成績をあげ、かつ人物において優れている者を対象に、有為な人材の育成に資することを目的に学資金が給付されます。また学業奨励賞も同様の資質を持つ学生を対象に、学業奨励に資することを目的に贈られます。また、青山学院大学大学院給付奨学金は、本学大学院に在籍する学生のうち、学業成績、人物とも極めて優秀と認められる者に対して学資金の給付を行うことにより、将来、社会および文化の発展向上に寄与する人材の育成に資することを目的としています。

2007年度は、青山キャンパス ガウチャー記念礼拝堂（6月20日（水））において授与式が行われました。

〈給付奨学金・学部〉

教育学科／増田 朋世
英米文学科／堀野 由莉恵
英米文学科／藤部 ゆかり
フランス文学科／穴澤 紗織
フランス文学科／黒栁 愛子
日本文学科／川口 裕子
史学科／小野瀬 あや
心理学科／種村 賢治
経済学科／蓮沼 佳奈子
経済学科／鈴木 健久
経済学科／井上 祐貴
法学科／下山 慧子
法学科／溝道 めぐみ
法学科／小関 香那子
経営学科／曹 俊
経営学科／佐藤 美帆
経営学科／小俣 陽子
物理・数理学科／阿部 哲也
化学・生命科学科／稲垣 由紀
電気電子工学科／石橋 孝裕
機械創造工学科／安部 翔一郎
経営システム工学科／荒川 俊宏
情報テクノロジー学科／西尾 華織
国際政治学科／平井 麻祐子
国際経済学科／田名部 裕子
国際経済学科／房本 亜希
第二部教育学科／岩﨑 悠子
第二部英米文学科／髙橋 愛
第二部英米文学科／江藤 昌晶
第二部経済学科／赤池 達朗
第二部経済学科／木下 茂
第二部経済学科／末永 啓
第二部経営学科／内堀 智子
第二部経営学科／重田 あおい
第二部経営学科／前森 美起

〈給付奨学金・外国人留学生〉

教育学科／張 晨奕
教育学科／金 景玲
経済学科／金 英實
経済学科／張 婷
経営学科／林 菲
経営学科／李 東昱
経営学科／趙 玲漢
国際政治学科／曽 知一

〈学業奨励賞〉

教育学科／唐澤 志郎
教育学科／渡邊 朝美
教育学科／副島 由香里
教育学科／飯嶋 さや香
教育学科／金子 夏佳
英米文学科／宮内 真衣
英米文学科／廣津 淳美
英米文学科／小磯 理絵
英米文学科／伊藤 真奈美
英米文学科／渡辺 明日香
英米文学科／小倉 佳子
英米文学科／冨田 理絵
英米文学科／久米 夏子
英米文学科／小林 寛美
英米文学科／荻原 香織
フランス文学科／田中 智子
フランス文学科／小林 香央莉
フランス文学科／ 財津 友里
フランス文学科／池田 里美
日本文学科／松上 あかり
日本文学科／山口 百恵
日本文学科／野中 千嘉
日本文学科／新海 留美子
史学科／加藤 典子
史学科／根本 千明
史学科／林 慧旼
史学科／今井田 悠
心理学科／山口 麻美
心理学科／鈴木 萌々子
心理学科／石渡 彩乃
心理学科／豊島 泰子
経済学科／滝沢 恵美
経済学科／鬼頭 百恵
経済学科／雨貝 謙一
経済学科／畠 友恵
経済学科／吉原 真央
経済学科／川野 真由
経済学科／五月女 圭介
経済学科／渋谷 悦子
経済学科／蘭 淼
経済学科／船本 裕里
経済学科／平塚 卓
経済学科／小林 功太
経済学科／金内 健
経済学科／日下部 沙織
経済学科／小川 友美
法学科／鷲田 梓
法学科／日鼻 葵
法学科／岡本 藍
法学科／内海 桃子
法学科／嘉瀬 藍佳
法学科／李 玄里
法学科／星 宏明
法学科／縫田 匠
法学科／新見 眞史
法学科／根引 真帆
法学科／小金井 達也
法学科／鈴木 啓太
法学科／髙萩 貴一
法学科／鈴木 理子
法学科／寺田 浩平
経営学科／髙橋 光生
経営学科／竹ヶ原 久美
経営学科／金 鍾徳
経営学科／中津留 実香
経営学科／柴田 正太郎
経営学科／近藤 彩
経営学科／中川 悠季
経営学科／深谷 めぐみ
経営学科／小川 葉子
経営学科／青木 もも
経営学科／古見 友紀
経営学科／斉藤 久美
経営学科／木村 紗希
経営学科／木次 剛規
経営学科／矢野 陽士
物理・数理学科／飯田 絵里菜
物理・数理学科／小田桐 正和
物理・数理学科／坂本 唯
化学・生命科学科／千歳 直明
化学・生命科学科／藤田 華奈
化学・生命科学科／山本 恵理子
電気電子工学科／稲垣 雄志
電気電子工学科／井上 祐
電気電子工学科／大神 真樹
機械創造工学科／蓮沼 将太
機械創造工学科／戸貝 公宣
機械創造工学科／阿部 貴洋
経営システム工学科／南 陽子
経営システム工学科／川下 隆司
経営システム工学科／土佐 和弘
情報テクノロジー学科／青木 宏文
情報テクノロジー学科／武田 信也
情報テクノロジー学科／森永 拓哉
国際政治学科／安生 つばさ
国際政治学科／芦川 里奈
国際政治学科／髙田 恵子
国際経済学科／片野 沙織
国際経済学科／井本 悠樹
国際経済学科／山本 邦子
国際コミュニケーション学科／大井 麻美
第二部教育学科／小塩 鈴加
第二部教育学科／磯﨑 祐介
第二部教育学科／上町 早紀
第二部英米文学科／遠藤 祐美
第二部英米文学科／石鍋 さわ子
第二部英米文学科／山口 麻子
第二部英米文学科／岡本 亜紀
第二部経済学科／川瀬 竜
第二部経済学科／深田 知利
第二部経済学科／草嶺 長孝
第二部経済学科／島田 紫
第二部経済学科／須山 淳子
第二部経済学科／牧 和生
第二部経済学科／富田 玲奈
第二部経済学科／大平 晃弘
第二部経済学科／髙橋 義尚
第二部経営学科／藤田 茂弘
第二部経営学科／大庭 まゆみ
第二部経営学科／菅野 琢磨
第二部経営学科／樋口 三江子
第二部経営学科／松村 尚東
第二部経営学科／船津 輝茂

2007年度課外教育プログラム活動報告

本学では大学後援会のご支援の下、青山学院の教育方針を具現化すべく、課外教育プログラムを実施しています。2007年度前期～夏期休業中に行われた行事を振り返ります。

●交流陶芸教室　―新入生・在校生交流企画―　（外部施設にて）

5月12日（土）、午前中と午後の2グループに分かれ、各20名程度の新入生および上級生が新宿の陶芸教室に集い、手作りの器作りに汗を流しました。すでに作品のイメージを思い描いて来ている人も多く、皿、茶碗、コップの3形状のグループに分かれると、学生同士、講師の方との会話を楽しみつつ、自分たちの描いた完成予想図へ向かって手ロクロやへら等を用い製作に励んでいました。時間をめいっぱいかけた作品は、どれも一人ひとりの個性が出ていて楽しくもすばらしいものでした。

この後は、素焼きを行い、さらに柚薬をかけて本焼の工程が必要ですが、時間の関係もあり、完成色見本を参考に各自が色を選び、陶芸教室にその後の工程をお願いして終了になりました。3週間後、大学に届いた作品を参加者に手渡すと、皆笑みもって受け取っていました。

●上級救急救命法講習会（青山キャンパス）

6月20日（水）、青山キャンパス4号館合同器楽練習室にて、「上級救急救命法講習会」が30名の参加により実施されました。

課外活動が本格化する夏季を前に、不慮の事故・事態に対する正しい応急・救命手当てを学ぶことで、自ら対応できるように企画されています。今年度も渋谷消防署のご協力により8時間の実習を行いました。午前中は学生一人ひとりが人形を相手に、心肺蘇生法を練習。最初は救助を求める発声等、恥ずかしい気持ちが先立ってしまいましたが、慣れてくるに従って、真剣な表情へと変わっていきました。後半にはAED（自動体外式除細動器）を使用した講習を行いました。昨今、徐々に普及しつつあるAEDの扱いにも、消防署の方の指導により円滑に行うことができました。学内にも随所に配置されています。早期のAED実施は、緊急の処置を必要とする患者を救命することにおいて、非常に有効な手段とされており、今後の救急救命において重要な機器になると考えられます。不慮の事故への対応はほんの数分が生死を分けるといわれています。この講習を通して、このわずかな時間の重みを理解し、的確な対応ができるようになることを期待したいと思います。

Club & Circle Information

問い合わせ先　〒150-8366
青山学院大学学生部学生課
Tel 03-3409-7835

＊主な文化連合会・体育連合会の活動予定。
下記大会演奏会の日程・場所は予定のものです。今後変更になる可能性もあります。

主要活動予定（2007年10月～12月）

バレーボール部（女子）　平成19年度秋季関東大学女子1部バレーボールリーグ戦（9月～10月）
バスケットボール部（男子）　第83回関東大学バスケットボールリーグ戦（9月～10月）
サッカー部　第81回関東大学サッカーリーグ戦（9月～11月）
硬式野球部　東都大学秋季リーグ戦（9月～10月 ）
ESS　チャーチル杯争奪高校生英語弁論大会（11月11日）
オラトリオソサエティ　第43回定期演奏会（10月20日）
競技ダンス部　東都大学学生競技ダンス選手権大会（10月21日）
リズムマンドリーノ　第46回リズムマンドリーノ定期演奏会（11月24日）
箏尺八研究会　定期演奏会（10月21日）
青山学院管弦楽団　定期演奏会（11月23日）
二部合唱部コールフロッシュ　定期演奏会（12月9日）
ロイヤルサウンズジャズオーケストラ　定期演奏会（12月22日）

主要活動報告（2007年8月～9月）

卓球部（女子）　第77回全日本大学対抗卓球選手権大会　優勝（14年ぶり）
チアリーディング部　JAPAN CUP 2007チアリーディング日本選手権大会　規定1位
バドミントン部女子　平成19年度関東大学秋季リーグ戦　優勝
フェンシング部　第14回東京都フェンシング選手権大会ジュニア女子エペ　優勝

News Index 2007.6～9

2007年6月から9月までの大学ウェブサイトで掲載されたニュースの主なタイトルを掲載しています。

07年6月

●山本吉宣教授が第8回「読売・吉野作造賞」を受賞
●「青山学院スタイル」に、穐田誉輝さんと藤田晋さん登場
●国際マネジメント研究科入試説明会（7/28開催）のお知らせ
●理工学研究科博士後期課程 2008年度入学試験概要決定と募集要項頒布について
●経済学部4年の小窪哲也君が日米大学野球選手権日本代表に選ばれました
●2008年4月、「総合文化政策学部」「社会情報学部」の設置と経済学部に「現代経済デザイン学科」の開設が了承されました
●青山学院大学では、財団法人大学基準協会に対して、2007年度認証評価申請を行いました

07年7月

●長谷川美貴　理工学部専任講師（化学・生命科学）らの研究グループが、世界で初めて偏光発光素子の仕組みを解明
●総合文化政策学部 B方式「小論文」について
●【緊急】7月15日（日）相模原キャンパスでのオープンキャンパスは中止いたします
●「平成19年新潟県中越沖地震」で被害にあわれた方へのお見舞いとお知らせ
●本学女子バレーボール部がシモンズ杯（第2回東西インカレバレーボール女子選抜優勝大会）で第3位入賞
●（本学関係者の方へ）「新潟県中越沖地震」災害義援金の受付をしています
●「青山学院スタイル」に、寺島しのぶさん登場
●相模原キャンパス オープンキャンパス（7/15開催予定分）の代替日程のお知らせ
●第24回 ユニバーシアード競技大会に本学関係者が選出されました
●大学院（文学・経済学・法学・経営学・国際政治経済学　各研究科）の2008年度募集要項を販売中
●法学研究科ビジネス法務専攻第2回説明会開催のお知らせ
●国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所との協定による難民を対象とする推薦入学試験について
●文部科学省の平成19年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に「ICT活用教育のFD/SDプログラム」が選定されました

07年8月

●国際マネジメント研究科入試説明会（9/8開催）のお知らせ
●女子卓球部が、第77回全日本大学対抗卓球選手権大会で14年ぶり9回目の優勝
●法学研究科ビジネス法務専攻第3回説明会開催のお知らせ
●「青山学院スタイル」に、硬式野球部河原井正雄監督登場
●法学研究科ビジネス法務専攻第4回説明会開催のお知らせ

07年9月

●2008年4月、大学院経済学研究科「公共・地域マネジメント専攻」の設置が了承されました
●会計プロフェッション研究科、入試説明会・個別相談会開催のお知らせ
●「青山学院スタイル」に、歌舞伎役者市川團十郎さん登場
●本学チアリーディング部（REESES）が「JAPAN CUP 2007チアリーディング日本選手権大会」に出場し、規定1位、総合4位に
●本学女子バドミントン部が平成19年度関東大学秋季リーグ戦で優勝

2007年度 就職関係行事

	行事タイトル	対象者	日程	備考
青山キャンパス	就職ガイダンス（同一内容4回実施）	2008年度卒業生	9月20日（木）、26日（水）、29日（土）	2008年度卒業生対象の第1回就職ガイダンス。就職部長による講演と今後の支援スケジュール説明。ガイドブック配付
	ミニガイダンス			
	・マスコミ業界の採用動向	学部3年生・院1年生	9月28日（金）	マスコミ志望の学生のために、業界の採用動向や仕事の実態を説明
	・4年生による就職活動報告	学部3年生・院1年生	10月2日（火）、3日（水）	充分な就職活動をして内定を得た4年生が、後輩に経験談を語る
	・Uターン就職	学部3年生・院1年生	10月10日（水）	Uターン・Iターン希望者のための情報収集法や心構え
	・女子学生の就職・メイク講座	学部3年生・院1年生	10月9日（火）、10月15日（月）	選択肢が広がってきた女性の働き方や、活き活きと就職活動をするためのメイク講座
	・社会人マナー	学部3年生・院1年生	10月31日（水）	説明会、面接、OB・OG訪問。あらゆる場面で必要となる基本的なマナーについて
	・新社会人のためのお金の話	学部4年生・院2年生	11月20日（火）	社会保険労務士による、働く前に知っておくべきことのアドバイス
	業界研究シリーズ	学部3年生・院1年生	10月、11月、12月	様々な業界の特色と採用の流れを押さえた上で、各業界で活躍する卒業生による話を聞くシリーズ
	エントリーシート対策シリーズ	学部3年生・院1年生	10月、11月	「適性検査」「自己PR」「エントリーシート」と分けて、自分らしい内容が書けるように
	外国人留学生対象セミナー	外国人留学生	10月17日（水）	外国人雇用サービスセンタースタッフによる就職活動の注意点
	第二部学生による応援講座	第二部学生	11月13日（火）、22日（木）	内定を得た第二部の4年生が後輩に語る、学生生活や就活アドバイス
	面接対策シリーズ	学部3年生・院1年生	12月	採用試験で必ず行われる面接に向け、自信を持って臨むための心構えを聞き、模擬面接へと繋ぐシリーズ
	業界・企業研究セミナー	学部3年生・院1年生	11月～12月、2月	業界をリードする企業の人事担当者やOB・OGによる説明会。教室形式およびブース形式
	学内OB・OG訪問	学部3年生・院1年生	2008年2月2日（土）	各業界の若手OB・OGと直接話をすることで、働く姿をイメージし、職業観を深める
	公務員採用試験説明会	公務員志望者	10月中	国家・地方公務員採用担当者による業務内容、採用試験の説明
	公務員試験対策セミナー	公務員志望者	10月	2007年度の公務員採用試験の傾向と、来年度受験に際しての心構え
	公務員試験合格者報告会	公務員志望者	12月12日（水）	公務員試験を合格した4年生による、勉強の方法やモチベーションの維持等アドバイス
	教員採用学内模試	教員志望者	12月15日（土）	来年度教員採用試験受験者のための公開模試を、学内価格で実施
	キャリアデザイン講座	第二部1・2年生	11月22日（木）～12月	なりたい自分になるため、社会の求める力などを知り、行動計画を立てる。自己発見レポートとグループワーク4回

※全ての行事に大学院生も参加できます。　詳細が決定しだい、学生情報サービス、掲示板等でお知らせします。

		行事タイトル	対象者	日程	備考
相模原キャンパス	理工学部生・大学院生対象	就職ガイダンス・内定者報告会	学部3年生・院1年生	10月3日（水）	就職全般のオリエンテーション・就職内定した先輩の貴重な活動体験を聞く会
		就職適性検査	学部3年生・院1年生	10月10日（水）	どんな仕事を求めているか、自分を活かせる仕事は何か等を知る検査
		製薬業界説明会・業界内定者相談会	化学系3年生・院1年生	10月17日（水）	製薬・化学品会社等に内定した先輩による相談会
		一般常識テスト	学部3年生・院1年生	10月24日（水）	国語・数理・英語・社会・時事などの一般常識テスト（有料）
		SPI-2模擬テスト	学部3年生・院1年生	10月31日（水）	多くの企業が実施している代表的適性検査（有料）
		エントリーシート対策講座	学部3年生・院1年生	11月7日（水）	自己分析・エントリーシートについて学ぶ、添削有り（有料）
		業種別内定者による報告・相談会	学部3年生・院1年生	11月13日（火）～21日（水）	自動車・電気・IT・運輸通信などの企業に内定した先輩による相談会
		面接対策講座	学部3年生・院1年生	11月21日（水）	面接の意味するもの、ポイントの説明、模擬面接実施
		業界研究会	学部3年生・院1年生	11月～12月	各業界のリーダー的企業による業界の仕事内容などの説明会
		学科就職ガイダンス	学部3年生・院1年生	2008年1月16日（水）	学科就職担当委員による学校推薦方法、内部進学などの説明会
		企業説明会	学部3年生・院1年生	2月下旬	各企業の採用担当者を招き、学校で実施する企業説明会
	全学年対象	公務員試験合格者報告会	全学年	11月24日（土）	勉強方法、苦労した点など内定者からの報告会
	低学年対象	キャリアデザイン講座	1・2年生	10月～12月	なりたい自分になる、社会で求められる能力など自分自身のスキルアップ
		4年生のアドバイス	1・2年生	11月14日（水）	企業を選択した基準は何か、1・2年生でやっておくべきこと等のトーク

※1～2年生対象行事は第2回公務員ガイダンスを除き前期中に終了しました。

青山学院大学進路・就職情報システム

青山学院大学独自の進路・就職情報を提供するオリジナルWEBサイトです。
本学学生であれば、学内のみならず自宅のパソコンからでも昼夜問わず利用することができます。
主な機能は、本学に送付されてきた求人票や会社説明会情報の検索、学内で開催される支援行事の案内、進路・就職センターや進路グループからのお知らせ等の閲覧などですが、内定者による入社試験記録や卒業生入社実績など本学ならではの情報も充実しており、就職活動の強力なサポートツールとして利用されています。
10月からは新機能を加え全面的なリニューアルを行い、さらに見やすく使いやすくなってスタートします。

「難民を対象とする推薦入学試験」2008年度入試より実施

7月30日（月）、青山学院大学と国連難民高等弁務官（UNHCR）駐日事務所は、難民を対象とする推薦入学・奨学制度に関する協定を締結し、共同記者会見と調印式を行いました。この協定は日本に居住する難民（条約難民、インドシナ難民、補完的保護を受けている難民）に高等教育の機会を提供するもので、本学ではUNHCRが推薦する難民を選考の上、2008年4月から受け入れます。同様の取り組みは関西圏ではすでに進んでいるものの、首都圏の大学では初めての試みです。募集人員は1名で、入学金・学費は全額免除とし、奨学金を支給します。本人の希望により入寮も可能です。

※難民学生入学後の勉強面、生活面全般をサポートする、学生ボランティアを募集する予定です。
詳細は後日ホームページにてお知らせします。

調印式で握手を交わす武藤学長と滝沢三郎UNHCR代表

青山学院大学後援会報告

2007年7月20日（金）、青山学院大学後援会評議員会（総会）がアイビーホール青学会館において開催されました。同後援会は、大学と家庭との連絡を密にして意思の疎通を図り、大学の教育および研究に必要な事業を援助する目的をもって設立された支援団体であり、青山学院大学に在籍する学生の父母ならびに保証人その他の有志によって構成されております。

主な事業は、下記の大学後援会予算案および決算報告書に示されているとおり、学友会活動補助等の学生活動に対する援助、首都圏並びに地区別に開催される父母懇談会の開催諸経費等その内容は多岐にわたります。

評議員会は毎年1回7月に開催され、前年度の事業報告および決算報告、当年度の事業計画および予算案が審議され、あわせて役員の選出が行われます。

今回は、新会長に杵家　弘和氏（長唄宗家派家元十七世杵屋勘五郎）、新副会長に飯田　哲生氏（三共化成工業（株））、同じく新副会長に小見山　満氏（小見山公認会計士事務所所長）をはじめ、新任・継続あわせて76名の役員が選出されました。

評議員会終了後、席を移し出席された役員の方々、本学院長ならびに学長ほか大学教職員をまじえ、交歓のひとときがもたれました。

2006（平成18）年度
大学後援会決算報告書

収入の部

（単位　円）

科　目	予　算	決　算	差　異
前期繰越金	20,964,026	20,964,026	0
会費収入	103,190,000	104,441,000	△ 1,251,000
合　計	124,154,026	125,405,026	△ 1,251,000

支出の部

（単位　円）

科　目	予　算	決　算	差　異
学生活動関係			
学友会活動補助	33,000,000	32,998,870	1,130
学友会活動指導補助	14,000,000	13,850,000	150,000
保険料	12,000,000	11,961,050	38,950
奨学金事業補助	10,000,000	10,000,000	0
大学行事補助	2,000,000	663,036	1,336,964
ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ・ｸﾞﾙｰﾌﾟ会合費補助	1,100,000	965,000	135,000
ゼミナール活動等補助	1,200,000	500,000	700,000
構内環境整備補助	15,000,000	15,000,000	0
奨励金	3,000,000	2,100,000	900,000
後援会行事関係			
父母懇談会費	20,000,000	18,399,272	1,600,728
旅費交通費	100,000	62,140	37,860
会議費	1,800,000	968,586	831,414
消耗品費	100,000	1,135	98,865
通信費	100,000	47,000	53,000
教職員関係他			
慶弔費	1,200,000	810,000	390,000
雑費	200,000	0	200,000
予備費	9,354,026	0	9,354,026
支出計	124,154,026	108,326,089	15,827,937
次期繰越金	0	17,078,937	△17,078,937
合　計	124,154,026	125,405,026	△ 1,251,000

2007（平成19）年度
大学後援会予算

収入の部

（単位　円）

科　目	2007年度予算	2006年度予算	差　異	摘　要
前期繰越金	17,078,937	20,964,026	△ 3,885,089	会費収入内訳 第1部 @6,000円 ×14,970名 = 89,820,000円 大学院 @3,000円 × 1,290名 = 3,870,000円 第2部 @3,000円 × 510名 = 1,530,000円 〃 @4,000円 × 2,020名 = 8,080,000円
会費収入	103,300,000	103,190,000	110,000	
合　計	120,378,937	124,154,026	△ 3,775,089	

支出の部

（単位　円）

科　目	2007年度予算	2006年度予算	差　異	摘　要
学生活動関係				
学友会活動補助	33,000,000	33,000,000	0	学友会クラブ活動補助他
学友会活動指導補助	14,000,000	14,000,000	0	学友会指導者・監督への謝礼（交通費一部負担額）他
保険料	12,500,000	12,000,000	500,000	学生教育研究災害傷害保険
奨学金事業補助	10,000,000	10,000,000	0	奨学資金への補助
大学行事補助	2,000,000	2,000,000	0	大学行事補助
ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ・ｸﾞﾙｰﾌﾟ会合費補助	1,000,000	1,100,000	△ 100,000	アドバイザー・グループ会合費補助
ゼミナール活動等補助	1,200,000	1,200,000	0	ゼミナール活動補助他
教育環境整備補助	15,000,000	15,000,000	0	教育環境整備補助
奨励金	3,000,000	3,000,000	0	学業奨励他
後援会行事関係				
父母懇談会費	20,000,000	20,000,000	0	首都圏及び地区別父母懇談会開催諸費用
旅費交通費	100,000	100,000	0	事務連絡交通費
会議費	1,200,000	1,800,000	△ 600,000	評議員会・懇親会費用
消耗品費	50,000	100,000	△ 50,000	事務用消耗品
通信費	100,000	100,000	0	役員会・評議員会通信費
教職員関係他				
慶弔費	1,200,000	1,200,000	0	学生・教職員等の慶弔費用
雑費	0	200,000	△ 200,000	
予備費	6,028,937	9,354,026	△ 3,325,089	
合　計	120,378,937	124,154,026	△ 3,775,089	

誌上公開講座　No.39

青山スタンダード
教養コア科目　科学・技術の視点（個別科目）
「地球と人間」

三條　和博
経済学部　教授

1. 21世紀を生き抜くための「知的武装」のススメ

科学・技術に無関心だとどうなるか―。授業はこの問いかけから始まります。続いて、医療現場で深刻な耐性菌の問題や、原子力発電所からの放射性廃棄物問題（特に寿命を迎え廃炉となる原子炉の処分問題）などの例を挙げ、現代社会が直面する科学・技術分野の課題と一般市民の無知・無関心との関係を解説します。

たとえば耐性菌は医師・患者双方による抗生物質への安易な依存が招いた問題ですし、解体原子炉の核廃棄物処理問題は、処分方法が確立しないまま原発を推進してきたツケが私たちの世代に回ってきた問題です。しかし実際の授業では、この段階ではまだ、多くの受講生には実感を伴って受け止めてはもらえません。そこで、ある化学物質を題材に、私たちが科学的思考法を理解していないと、無意識のうちにおかしな判断をしてしまう、という実例を受講生自身に体験してもらいます（詳細は企業秘密です!）。

授業では次に、より身近な問題を取り上げます。2007年1月に日本社会を騒がせた「あるある問題」を事例として、人々はなぜ「科学らしい」ものにダマされるのか、ダマされないために必要なことは何か、を説明します。ここでは「科学・技術リテラシー」の必要性について言及し、ダマされないための知的武装について考えます。なおリテラシーとは、「読み書きそろばん」といった、生活に必要な基本的技能のことです。専門家ではない一般市民にとって、重要なのは科学知識を豊富に持つことではなく、科学の持つ「客観的なものの見方」「合理的な思考の過程」を理解し、そのエッセンスを身につけておくことなのです。

2. 人類は絶滅を免れることはできない？

私の専門は地球科学・環境科学です。地球46億年の歴史から見ると、現在の人類文明はどう位置づけられるのでしょうか。授業では地球史を振り返り、地球誕生から人類文明発生までの気の遠くなるような長い道のりを説明していきます。その中で、生命とは何か、最初の生命はどのように発生したのか、生物はどのように進化してきたのかについて、現代科学における知見を紹介します。全13回の授業のうち、約半分の時間を地球史解説に使いますが、これはすべて、現代文明を地球的視点で理解するための基礎固めであると位置づけています。地球史解説の終わりには、受講生の皆さんにグラフ用紙を使って地球史年表を描いてもらっています。ただし、世界史や日本史などの歴史年表によくある、古い時代は短く簡略化され新しい時代が拡大され詳細に記述される、といったデフォルメされたものではなく、現実に即して時間間隔が均等に目盛られた年表です。この地球史年表に基づいて現代文明を眺めると、私たち人類の繁栄はほんの一瞬の出来事であることがよく理解されます。また、このように地球史を学ぶと、繁栄を極めた生物種は、その多くが絶滅や個体数の激減といった劇的な変化を経てきていることもわかります。私たち人類は現在、急速な個体数（＝人口）増加の途上にあり、もうしばらくはこの傾向が続くと予想されています。地球史の視点からは、このような生物がある時代に急速に減少したり、絶滅したりするのは「自然の摂理」と捉えることができるのです。

3. これからどう生きるのか？

人類は進化の過程で、高度な知能を獲得しました。問題は、それをどう使うか、です。人類は地球にとって、無秩序に増殖し続け母体を破壊し自らも死に至る、ガン細胞のような存在になるのでしょうか。あるいは、地球全体を最適状態にコントロールする、脳細胞の役割を担うのでしょうか。それはすべて、これまでの地球史で最後に登場した大物ルーキー、人類の努力次第なのです。この授業は、その問いかけをもって締めくくることにしています。

オープンキャンパス開催報告

2007年度オープンキャンパスは、7月22日（日）および9月16日（日）に青山キャンパス、相模原キャンパスは、7月15日（日）、台風4号接近に伴い中止し、9月24日（月・振休）に変更して開催されました。7月は青山キャンパスにて12,517名、そして9月には、青山キャンパスにて、5,236名、相模原キャンパスにて2,877名総来場者数は20,630名（昨年度20,412名）の高校生とその保護者のみなさまが来場し、本学への関心の高さがうかがえました。「吹奏楽バトントワリング部」「応援団」「チアリーディング部」「アナウンス研究会」などの学生団体をはじめ、青山スタンダード概要紹介、各学部・学科の紹介や模擬授業、英語入試問題解説、相模原でのキャンパスツアーなどさまざまな企画を、在学生・教職員の協力を得て実施いたしました。また例年のように実施にあたり多くのボランティア学生が受付や案内誘導等で協力してくださり、来場者に、明るく親切に応対している姿が見られました。

なお、7月28日（土）には、青山キャンパスにおいて、社会人を対象とした大学・大学院説明会を開催、386名（昨年度462名）が来場しました。キャリアアップをめざす向学心の強い方ばかりで、充実した説明・懇談が実施できました。

青山キャンパスでのボランティア学生のみなさん

相模原キャンパスでのボランティア学生のみなさん

「進学案内、入学試験データ&ガイド（2008年度版）」がウェブサイトで閲覧可能

大学紹介パンフレット「進学案内2008、入学試験データ&ガイド2008」は本学ウェブサイトで閲覧可能です。下記のアドレスにてご覧いただけます。（内容の一部抜粋）

http://www.aoyama.ac.jp/admission/college/reference/index.html

また、資料請求をご希望の方は、本学HP「入試・入学案内（学部）：大学紹介パンフレット請求方法」から、あるいは自動音声電話テレメールを利用してご請求ください。

アドバイザー・グループ紹介 ⑬

「臨床動作法」を実践する〈丸山アド・グル〉

丸山アド・グルでは、心理療法の一つである臨床動作法（心理リハビリテイション）の技法を用い、障害児・者に対して学生が実際に動作訓練を行っています。主な行事としては、障害児・者と行う月例訓練会（月1回・休日）、夏休み中の6泊7日（障害児・者親子は5泊6日）の集団宿泊集中訓練（通称：キャンプ）などがあり、こうした行事や不定期の飲み会には卒業生も参加しています。訓練はマンツーマンが原則で、対象者の行動が変化することがねらいなので、決して、いわゆるボランティア気分でできることではありません。自分と障害児・者とがからだとからだでしっかりとやりとりできているかどうかを常に考慮しつつ、相手のこころに働きかけていく必要があります。参加している学生たちが熱心に取り組む姿勢からは学ぶべき点も多く、障害児・者、学生、卒業生たち、そして自分自身が成長したなと感じるとき、この活動を続けてほんとうに良かったと思います。

文学部 丸山 千秋 教授

AGUニューズについて

青山学院大学では、大学広報誌「AGUニューズ」を年5回（1月、3月、5月、7月、10月）発行し、在学生の保証人の方々へ送付しています。また、在学生を対象としてキャンパス内AGUニューズ専用スタンドにて配布しています。

●なお、「AGUニューズ」を確実に保証人の方々へお届けするため、住所が変更になった場合は、住所変更の手続きをお取りください。

事務取扱窓口　青山キャンパス→学生部厚生課
相模原キャンパス→スチューデントセンター・学生生活グループ

広報入試センター広報課●2007年10月19日発行●